

静岡県博物館協会会報

No. 74

静岡の博物館



リニューアルした駿府博物館

静岡県博物館協会

平成26年度 第1回講習会 災害を識る。文化財を守る ～東日本大震災文化財レスキューをとおして～

日 時：平成26年10月3日(金) 14:00-16:20

会 場：沼津市立図書館 4階視聴覚ホール

内 容：「歴史を未来へつなげる―仙台における資料レスキュー活動と地域史の再発見―」

菅野正道氏（仙台市博物館市史編さん室 室長）

「静岡県第4次地震被害想定」板坂孝司氏（静岡県危機政策課 主査）

「文化財レスキューの紹介～静岡県における文化財救済体制～」

菊池吉修氏（静岡県教育委員会文化財保護課 主査）

主 催：静岡県博物館協会、富士三島沼津三市博物館連絡協議会

協 力：仙台市博物館、静岡県危機政策課、静岡県教育委員会文化財保護課

参加者：52名（うち静岡県博物館協会14名）

2011年の東日本大震災は、各地の歴史資料や文化財に甚大な被害をもたらした。被災地では資料の救出、応急処置や一時保管を行う文化財レスキュー活動が展開された。そこで救出された資料は、地域の歴史・文化を伝えるものとして復興の大きな拠り所になった。東海・東南海地震の発生が予測される静岡県でもこうした被害が想定される。今回の講習会は東日本大震災での文化財レスキュー活動の実例を学び、静岡県の地震被害想定や文化財救済体制を知ること、静岡の文化財を守る体制を再考しようというものである。

はじめに仙台市博物館市史編さん室の菅野正道氏より、東日本大震災時の資料レスキュー活動とその意義についてお話いただいた。地震が多い宮城県では震災前からNPO法人宮城歴史資料保全ネットワークによる活動実績があったため、震災時の対応も迅速だったようである。それでもガソリン不足や国の事業との調整により、資料レスキュー開始は震災後約1ヶ月半後となった。巡回調査では、生活再建中の被災者のもとに何度も足を運ぶことで信頼関係を築き、資料レスキュー活動をされた状況を知ることができた。菅野氏は「資料レスキュー」という言葉が使われたが、それは一般の方が「文化財」を価値の高いものと考え、身近な歴史資料のレスキュー要請を遠慮されがちなためだという。ロビーでは仙台市博物館が行った資料レスキュー活動をパネル展示でも紹介いただいた。

実際の活動を伺って感じたのは平常時の



情報収集や広報活動の重要性である。日常の交流や連携が災害時の資料レスキュー、ひいては歴史資料や文化財の活用に繋がることを強く感じた。被災地における体験や活動について伺えたことは、静岡県における対策を考える上で大変貴重で意義深いものとなった。

静岡県危機政策課からは「静岡県第4次地震被害想定」についてお話をいただいた。静岡では駿河トラフ、南海トラフ、相模トラフにおける地震および津波の大きな被害が想定されている。公開されている被害予測を知り、迅速な避難・対応を準備しておくことが重要な対策の一つとなるだろう。

静岡県教育委員会文化財保護課からは静岡県における文化財救済体制を紹介いただいた。静岡県では文化財等救済ネットワークや文化財等救済支援員の登録制度を設立している。「ふじのくに文化財マップ」ではインターネットを使って文化財の所在情報を紹介している。

今回の講習を通じて感じたのは、平常時の情報収集や連携、広報活動の重要性である。大きな地震が想定される我が県でどのような準備・対応が可能か。静岡県博物館協会として考えていきたい。

(事業推進グループ・公益財団法人上原美術館 土森智典)

平成26年度 第2回講習会 展示作品の取り扱い

日 時：平成27年1月9日(金) 13:30-15:30

会 場：浜松市美術館 講座室

内 容：(1)取り扱いに関する注意事項等説明

(2)実習

①陶器の梱包

②掛軸・巻子の取り扱い

③仏像の梱包

(3)質疑応答・講評

協 力：ヤマトロジスティクス株式会社

参加者：55名

多くの学芸員を始めとする博物館施設で働く者にとって、展示や調査研究に伴う作品や資料等の取扱いは、誰もが避けることのできない作業である。また、取扱う美術博物資料は掛け替えの無い貴重なものであることから、当然慎重な扱いとともに正しい方法とスキルが求められる。今回はそのような美術博物資料の取扱いに関して、実習を通じて正しい取扱い方法とポイントについて学ぶ講習会の実施をヤマトロジスティクス株式会社をお願いした。

講習会は、ヤマトロジスティクス株式会社・土屋氏より、取り扱いに関する注意事項等の概要を説明いただいた後、具体的な美術品を用いた実習を行った。最初は、綿布団の作り方に始まり、陶器の梱包から元に戻すまでの実習である。受講者は、同社・吉川氏による全体説明に従い、6～7人のグループに分か

れて陶器を扱った。綿布団の作り方に伴い、和紙の縦横の特徴を説明いただいたり、陶器については、材質が滑りやすいことから白手袋を着けず素手で扱うことを強調されていたのは、ポイントとして印象深い。次は、掛軸と巻子の二手に分かれて行った。掛軸は、吉川氏による説明に従い、数名の希望者が実際に掛軸を、箱から外し、壁に掛け、再び箱に戻す一連の扱いを行った。巻子は、同社・西坂氏に扱いのデモンストレーションを行っていただいた。最後は、仏像の梱包である。輸送のためのクレートの構造と仏像の固定方法を説明いただいた後、デリケートで輸送時に衝撃を受け易い、腕や手の周りの部分梱包のデモンストレーションを行っていただいた。引き続き、受講者は実習用の手の模型を用いて、梱包の練習を行った。

今回の受講者の方々は、県内の様々な博物館施設から参加いただいたが、必ずしも取扱う資料の範疇は美術品に限るものではなく、むしろ美術品以外の資料を扱うことが多いのかもしれない。しかし、受講者の方々は熱心に取り扱いの説明に耳を傾け、実習に取り組んでいた。取扱う資料のジャンルや形態が異なっても、資料に接する姿勢や扱う方法の基本は共通するものだからであろう。また、講習時間のほとんどが受講者自身による取扱いを体験する参加型だったこともあり、何よりも「習うより慣れよ」の一句が当て嵌まる講習会となった。

(事業推進グループ・資生堂企業資料館 伊藤賢一朗)



平成26年度 第3回講習会 館園の広報

日 時：平成26年3月6日（金） 13：30～16：30

会 場：静岡市美術館多目的室

参加者：30名

講 師：株式会社ウィングダム 専務取締役 沼澤秀夫氏

株式会社主婦の友社 法務課長 阿南一徳氏

静岡市美術館 学芸員 青木良平氏

今回の講習会は「館園の広報」をテーマとして、広報に詳しい3名の方の発表を軸として開催した。

はじめに株式会社ウィングダムの沼澤英夫氏にお話しいただいた。同社は首都圏を中心に、美術館など展覧会主催者からの広報の委託を業務としている。その内容は各種イベントの企画、プレスリリースの配信システムなどである。今回はこれらに関して具体的な事例も交えながらご説明いただいた。また情報発信についての具体的なアドバイスや、日本科学未来館や岡田美術館など、最新の事例についてもご紹介いただくことができた。

次に主婦の友社の阿南一徳氏より近年のSPACの広報活動への取り組みについてお話しいただいた。阿南氏はカザルスホールで広報を担当した経験などを生かし、SPACで広報アドバイザーを務められている。昨今のメディアでもその活動が話題になることが多いSPACであるが、阿南氏がアドバイザーに就任する以前のメディア露出は非常に限られていたという。同氏は例えばプレスリリースについて語句の使い方など細かな部分まで改善し、またプレスとの関係性の見直しを行うことで、メディアへの露出を大幅に増やすことができたという。海外公演など華やかな報道の裏側には地道な努力の積み重ねがあったことを感じさせた。

最後に会場でもある静岡市美術館の広報担当・青木良平氏に日頃の業務についてご報告いただいた。同館では各展覧会の広報業務について、チラシ・ポスター制作は展覧会担当が中心に行うが、その他の業務については広報担当が一括して管理する。広報担当はプレスリリースの配信、取材対応、SNSなどを通じたイベント告知はもちろん、展覧会終了後は来館者へのアンケートを集計し、広報の効果について分析を行う。こうした一連の業務について昨年開催された「山本二三展」に基づきながら説明していただいた。特に最後に広報効果をきめ細やかに分析し、次の展覧会へ活かすという良い循環が生み出されている点は大変参考になると思われた。

また会場内にブースを設け、参加者が所属する館園のチラシ等を持ち寄り、意見交換できる場として活用した。

限られた予算の中でいかに効果的な広報を行うか、各館園にとって常に悩ましい問題ではある。今回は様々な立場から実際の業務に沿ってお話いただくことで、各参加者にとってヒントになる情報を提供できたのではないだろうか。

(事務局・静岡県立美術館 浦澤倫太郎)

